

第1章 研究の概要

1 研究の背景と目的

平成22年3月に中央教育審議会は、「児童生徒の学習評価の在り方について」報告を行った（中央教育審議会，2010）。そこでは、「学習評価とは、学校における教育活動に関し、児童生徒の学習状況を評価するものである」と定義したうえで、学習評価を踏まえた教育活動の改善の重要性については、「各学校における学習評価は、学習指導の改善や学校における教育課程全体の改善に向けた取り組みと効果的に結び付け、学習指導に係るPDCAサイクルの中で適切に実施されることが重要である」としている。さらに、知的障害教育においては、「個別に設定した指導目標や内容に基づいて指導が行われている」が、そこでは、「目標設定や指導内容・方法の妥当性に十分配慮することが」求められているとしている。

また、本研究所知的障害教育研究班が予備的・準備的研究として行った平成24年度専門研究D「特別支援学校（知的障害）における学習評価の現状と課題の検討（予備的・準備的研究）」における調査では、評価の観点を定めて学習評価を行っている学校がある一方で、共通の観点を定めたり、評価の時期、方法を共有化したりするなどの組織的な取組にまでは必ずしも至っていない学校が多いことが明らかになった（国立特別支援教育総合研究所，2012）。個々の回答状況をみると、授業ごとや、一つの單元ごとに学習評価は行われているが、相互の関連付けや、年間指導計画に基づく総括的な学習評価との結び付きが明確になっていない点も窺われた。

こうした点を踏まえ、本研究では、知的障害教育における組織的・体系的な学習評価の推進を促す方策を明らかにすることを目的に、特別支援学校（知的障害）の実践事例を踏まえた検討を通して研究を進めることとする。具体的には、①観点別学習評価の在り方、②学習評価を学習指導の改善に生かすための工夫、③学習評価を児童生徒への支援に活用する方策、④組織的・体系的な学習評価の推進を促す方策の4つについて検討することとする（以下この4点を本研究において検討する4つの柱とする）。

本研究により、評価の観点を定めた学習評価の方法の工夫、組織的・体系的に行う学習評価のPDCAサイクルといった学習評価の実施方法や活用等の在り方について、提示することができると考える。本研究により、特別支援学校（知的障害）において組織的・体系的な学習評価を進めるために必要な情報が提供されることで、目標設定や指導内容・方法の妥当性が高まり、教育活動の充実が図られることを期待するものである。さらに、特別支援学級における学習評価の進め方の参考資料となる知見も得られるものであると考えられる。

2 研究の全体構造

本研究の全体構造を図 1-2-1 に示した。なお、研究の推進にあたっては、文献研究や研究協力機関への訪問による聞き取りのほか、研究協力者及び研究協力機関との研究協議会を各年 2 回実施し、データの収集と分析や検討を行った。

(1) 研究の背景と問題の検討—学習評価に関連する言葉や概念の整理と「体系的な学習指導のPDCAサイクル概念図」の作成—

本研究で最初に取り組んだのは、学習評価について共通の言語で議論するための、学習評価に関連する言葉や概念の整理である。併せて、中央教育審議会の報告や学習指導要領における学習評価に関する記述と照らし合わせて、知的障害教育における学習評価の意義について検討を行った。その際、先行研究となる国立特別支援総合教育研究所（2012）の結果も参考にした。

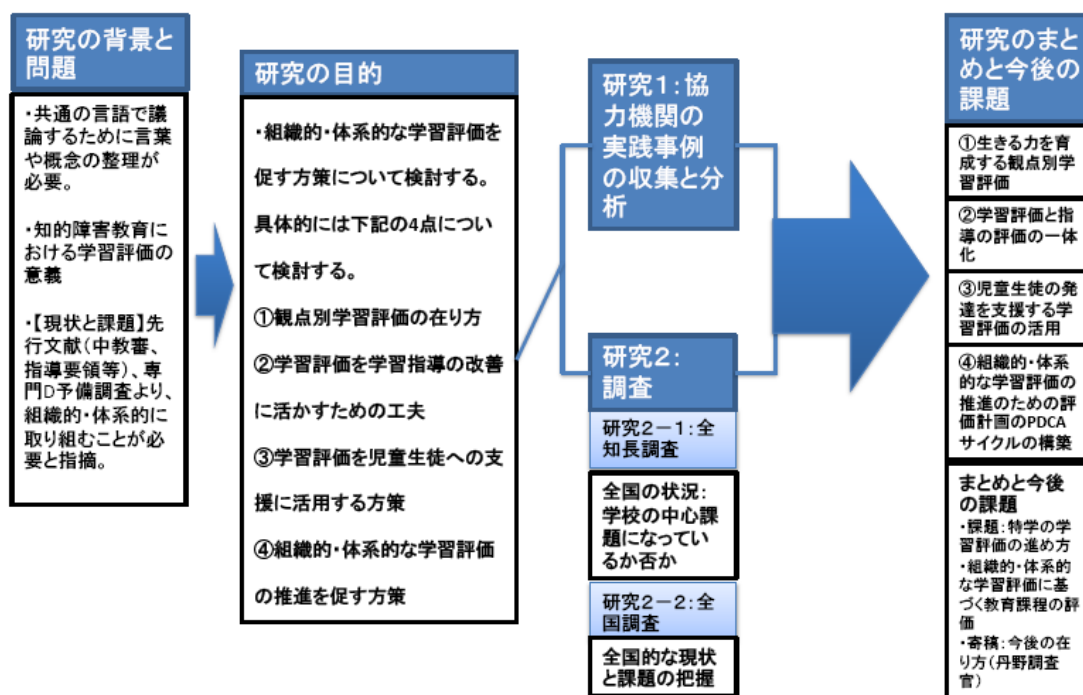


図 1-2-1 本研究の全体構造

次に、学習評価に関連する言葉や概念の整理をもとに、「体系的な学習指導のPDCAサイクル概念図」(図 3-2-1)を作成した。なぜなら、中教審報告(2010)では、「学習評価は、児童生徒の学習状況を検証し、結果の面から教育水準の維持向上を保障する機能を有するものである」とし、「各学校における学習評価は、学習指導の改善や学校における教育課程全体の改善に向けた取組と効果的に結びつけ、学習指導に係るPDCAサイクルの中で適切に実施されることが重要である」としているからである。まず、学習指導に係るPDCAサイクルについて、Plan(学校教育目標を受けた教育課程

の編成・年間指導計画・単元計画・単元の目標・評価規準や評価計画も含めた指導計画の作成)、Do(指導計画・評価計画を踏まえた教育活動の実施)、Check(学習状況の評価・授業の評価・指導の評価)、Action(授業改善・指導計画の改善・個に応じた指導の充実)というPDCAサイクルを図に表した。これに、本研究において検討を進める4つの柱(①観点別学習評価の在り方、②学習評価を学習指導の改善に生かすための工夫、③学習評価を児童生徒への支援に活用する、④組織的・体系的な学習評価の推進を促す方策)との関連を図の中に示して整理した。

(2) 研究協力機関における実践事例の収集と分析

さらに、研究協力機関より収集した特色のある取組について、その背景や要因を分析して課題を明らかにし、本研究において検討する4つの柱との関連を整理することで、組織的・体系的な学習評価の推進を促す方策について検討を進めた。研究協力機関において評価の観点や評価方法の工夫、学習評価のPDCAサイクルについての聞き取りを行い、収集した実践事例の分析から、組織的・体系的な学習評価を進めるために参考となる事項を明らかにした。

(3) 学習評価に関する全国調査

また、特別支援学校(知的障害)を対象に、組織的・体系的な学習評価の推進を促す方策について質問紙調査を実施し、今後の推進方策についても検討を行った。これらにより、評価の観点を定めた学習評価の方法の工夫、組織的・体系的に行う学習評価のPDCAサイクルなどの学習評価の実施方法や活用等の在り方について、検討した。

(4) 研究のまとめと今後の課題

上記(2)及び(3)の研究結果を元に、①観点別学習評価の在り方、②学習評価を学習指導の改善に生かすための工夫、③学習評価を児童生徒への支援に活用する方策、④組織的・体系的な学習評価の推進を促す方策毎に考察し、今後の課題について検討した。

3 研究成果の公表・普及

- ・平成25年8月の日本発達障害学会第48回大会(早稲田大学)にて、自主シンポジウム「知的障害教育における学習評価ー組織的・体系的な学習評価の推進を促す方策を考えるー」を行った。
- ・平成26年度全国知的障害特別支援学校長会第1回及び第3回代表者研究協議会において、本研究の中間発表を行い、本研究の理解、普及を図った。
- ・平成26年9月の日本特殊教育学会第52回大会(高知大学)にて、自主シンポ

- ジウム「知的障害教育における組織的・体系的な学習評価を促す方策」を行った。
- 平成 26 年度研究所セミナー（平成 27 年 1 月）において、本研究の研究成果について発表した。

（涌井恵・横尾俊・松見和樹）